

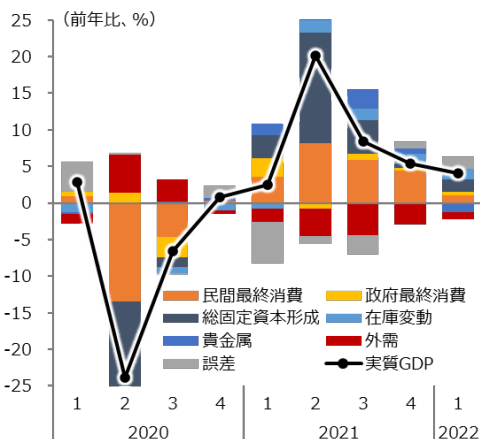
インド

インドGDP（2022年1-3月期）

経済成長に向けたハードル – インフレ圧力と資本流出リスク –

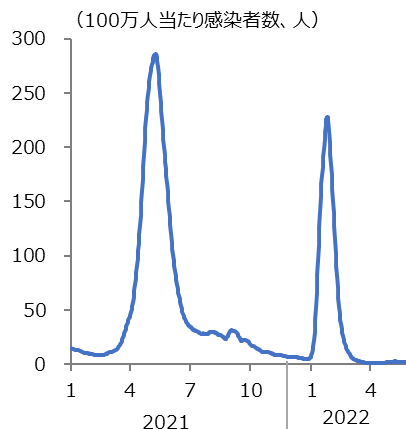
政策・経済センター
金成大介
03-6858-2717

1 実質GDP成長率



注：CEICより三菱総合研究所作成

2 新型コロナの新規感染者数

注：直近は22年5月31日。
出所：CEICより三菱総合研究所作成

評価ポイント

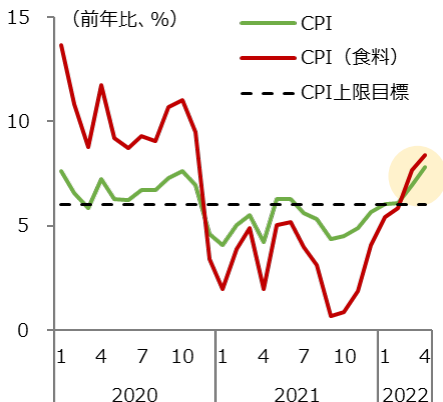
今回の結果

- 22年1-3月期のインドの実質GDP成長率は前年比+4.1%と、10-12月期の同+5.4%から鈍化した（図表1）。その結果、21年度（21年4月-22年3月）の実質GDP成長率は、同+8.7%となった。
- オミクロン株流行により急拡大した新型コロナ感染者数（図表2）を抑制するための行動抑制策から、22年1-3月期の民間消費が前年比+1%へ低下したことが（21年10-12月期、同+4.5%）成長率の鈍化をもたらした。

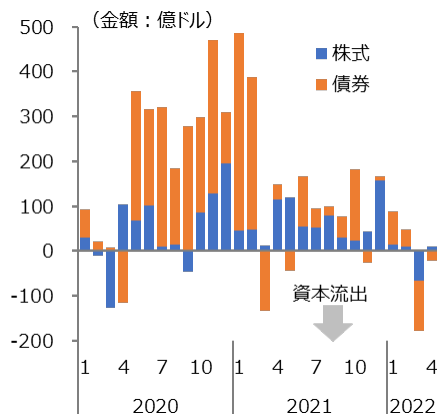
今後の注目点

- 3月以降、新型コロナ感染者数はピークアウト、22年5月末時点のワクチン接種数も人口の1.4倍相当の19億回に達している。防疫と経済の両立の進展が、今後の経済成長の下支えとなろう。
- 一方で、インフレ圧力の増大が経済の先行きの不安材料となっている。インドのCPIは、今年に入りインド中銀の上限目標である前年比6%に達し、食料価格が騰勢を強め、4月のCPIは同+7.8%と上昇ピッチを強めている（図表3）。食料価格上昇の個人消費への悪影響を緩和するため、インド商工省は、5月14日に小麦の輸出停止を発表している。
- また、欧米各国の金融緩和を背景に積み上がったインドへの資本流入が、欧米各国の金融政策転換を契機に資本流出に転じるリスクがある。実際、22年2-3月に株・債券合計で190億ドル弱のインドからの資本流出があった（図表4）。20年の資本流入規模を鑑みると、資本流出リスクもくすぶっている。
- こういった状況下、インド中銀は5月2-4日に臨時的金融政策決定会合を開催し、政策金利の4%から4.4%へ3年9か月ぶりの利上げを決定し、インフレ抑制を重視する意向を示している。
- インフレ圧力、資本流出リスクは経済成長に向けたハードルとなり、インフレ抑制重視の金融政策と併せて先行きのインド経済成長の重しとなろう。22年度の経済成長は、21年度実績を下回る公算が大きい。

3 CPI

注：直近は22年4月。
出所：CEICより三菱総合研究所作成

4 証券投資フロー

注：直近は22年4月。
出所：IIFより三菱総合研究所作成